

3427 カナディアン・ロッキー：状況と心模様②

この作品の風景との出会い、実に楽しかった。

眼前の光景、平凡なようで平凡でない。何か気になる。私の心を捉えた。

絵画ならデフォルメ可能だが写真画像。主役、脇役、借景、構成や構図、光と影、色彩。

やり直しをしない。デジタルのように、直せばいいという考えはない。

眼という最高のレンズを駆使して、心に写し込む。

何かが欠けている。何かが足りない。余分なものが写る。そんな状況が多い。

この日、こだわったのは、湖面の影。

画龍点睛、山も木も動かない。動くのは、風による湖面と、光の変化、見え方も違って来る。

山の影は、この場合、鮮明すぎて面白くない。風と光、思うようにはならない。

距離感や立つ位置によって見え方も違って来る。まだ一枚も撮っていない。

未だ、高揚感がない。今の場面、私の望む場面ではない。頭で考えていても、その通りには、

微笑んでくれない。ひたすら、感性が反応する時を待っている。

単なる、情報発信や記録の場合には、そんな苦労はしない。好きでやっている事で、やっている事が、まったく、苦にならない。思い通りになる確率が少なくとも、待ち続ける。

その場に溶け込むと、時間も何もかも忘れてしまう。忘我の時が来る。

この場合も三脚は使わない。柔軟に。今、充分に手持ちで撮れる、十分な光がある。

久楽のモチーフ、素材は、構図が命、光景の瞬間を切り撮る。

自然は、似たようなものがあったとしても、同じ表情は見せない。

その平凡な光景の中に、非凡なものを見つける面白さ。それは、独りよがりの世界。

芸術家志望、それでいいのだと思っている。

主役が木で、何々が脇役と決めてしまうと自由でない。脇役が輝く瞬間がある。

主役を食ってしまう。光と構図と造形の面白さ。

私の領域でも、同じ事が起こる。メイクでなく、メイクの世界。

思い通りにならない大自然。自然は、造形や色彩はじめ、大芸術家と敬意を払っている。

人の行かない場所や辺境、未知への挑戦時に会う面白さ。

見たことのない造形や色彩にお目にかかった時の感動は、言葉にならない。

作品にできなかった、幻の光景の数々、頭と心に残っている。

この眼前の光景、どれだけ時間が経ったのか、この場所に私はまだいる。

何もしないで座って湖面を眺めるだけ。

心地よくなってきて、肩から力が抜けてきたような感じ。その時、頬に微かな風を感じた。

突然、鮮明な湖面の影が、思いの影になった。フットワーク良く…

～～余談～～

余韻を楽しみながら、湖水を散策し、道路近くまで行った。

突然、その静寂（しじま）を破られた。大阪のおばちゃんの登場である。

夜明けから相当時間が経っている。観光バスが通る時間、普通はここまで来ない場所である。

私にカメラを押し付け、早よ、撮ってと、あまりの人懐っこさに驚くやら、

びっくりするやら、ロッキー山脈の中で、意外な展開。

そのバイタリティとその絶妙のアプローチ、これは世界にも通じる。

そんな物語があるだけに、この作品の思い出は強い。帰国後産経新聞に紹介された。

大阪のおばちゃん、どこかで見ているかもしれない。「私も撮りました」と声が聞こえそう。

そんなの、考えすぎ。奇跡の出会いがあったら面白いのに。

ロッキー山脈で会って、大阪で再会なんて、見ず知らずの人と、何ともグローバルな話、

実現しないかな～。ありえない。ありえない。あるかもしれないのが世の中。

そんな夢想も時には面白い。

私の幼少体験、孤独をいかに飼い慣らすか。

その一つは夢。その一つは遊び心。マメさと遊び心は、今も健在。

今、世間は虚像がまかり通っている。虚に口をつけると嘘。おばちゃんの話は本当の話。

なぜか強く心に残った。同時に、この作品も思い出が倍になった。

大阪のおばちゃん、ありがとう。元気をもらった。

その後の地球ひとり旅も、常に前向きに、生涯、現役を目指して、元気発信。